学校での礼拝

――中・高校の場合――

ジェーン・B・ロイド
（大下　道訳）

ウールウィッチ（南ロンドン）の主教、ジョン・A・T・ロビンソン博士は、英国の新聞で道徳や宗教について、ありきたりの意見とはほど遠い主張をする人としてよく知られています。彼は新約聖書研究の立派な学者ですが、また、現代の世界においてキリスト者であることは、どんな意味をもつのかという問題に対して、新鮮な洞察力をもっています。このロビンソン博士は、最近、『神に対して正直であれ』という小さい本を出版しました。この本は、神学者のみならず、牧師や一般信徒の間でも、真の魂を求めるような論争をひきおこしました。祈りと礼拝に関する「この世における神聖さ」という章は、いくつかの問題を提起しますが、それは礼拝の意味と役割に関してなされている議論に一つの基盤を与えています。彼の主張はこの問題に対する直接の答ではなく、一つのチャレンジであります。彼は、教会で行なわれていることが、「宗教的でない」人々にどのような意味をもつかということをまじめに検討すべきであると言っています。その主張は、教会における礼拝とキリスト者と自認している人の礼拝とに焦点があるの

ですが、それはまた、キリスト教主義の学校において、信徒でない生徒の間で礼拝をまもっている私たちにもふかいかかわりをもっています。

まずキリスト教会での礼拝とキリスト教主義の学校での礼拝とは、本質的には共通の要素をもっていますが、この二つの礼拝は異なる性質のものであります。私たちはこの二つを同一に考えることはできません。教会の礼拝はおもに（理想的には）信徒からなる会衆によってなされ、一方、学校の礼拝は単なる聴衆を対象としています。教会の礼拝に集まる大多数の人々は（学校教会の性格をもった同志社教会は当然例外であるが）イエス・キリストの弟子であり、ともに神を礼拝するという一つの目的をもっています。彼らは共に、神に対して讃美と感謝を表らわし、あやまちを懺悔し、新たな許しをうけるのです。自分と全世界のために祈り、神のみことばを学び、神に対する捧げものとして日々の仕事に精励し、人々への奉仕を行います。私たちは、信徒である「会衆」が礼拝で話されたり、なされたりすることについて一応の知識をもっていると見なすことがきる。教会では、心からキリスト者たらんと努力している人々と一緒にいることを自覚し、礼拝の中心である聖餐式にともにあずかるのであります。

一方、学校の礼拝に出席する「聴衆」は、全く異なっています。あらためて詳しく定義する必要はありませんが、「聴衆」と一概に言つても、それは多種多様であります。クリスチャン・ホームで育ち、教会学校へ行ったことのある生徒もわずかながらいますが、大多数は宗教的でない（キリスト教的でないばかりでなく）家庭で育って生徒です。多くの生徒は心をひらいてキリストの真理を気持よくうけいれますが、全く無関心な生徒も少なくありません。またなかにはキリスト教に対してすでに偏見をいだいている生徒もかなりいる有様です。そこで「信徒である会衆」の礼拝形式を、学校の礼拝で生徒たちに押しつけることは、彼らに理解されないだけでなく、むしろひどく誤解され、かえって反抗心をひき起こす原因となることも多いのです。いくら形式が保たれていても、キリスト教教育や礼拝が実際に行なわれているという保証にはなりません。

そこで、「聴衆」と礼拝をする場合、私たちにとって根本的に必要なことは、礼拝の目的をくりかえし検討することです。私たちはなぜキリスト教徒でない「聴衆の間で礼拝をまもるのか？ 何のために生徒がここにきているのか？ この若者たちの心の中で神はどのように考えられ、感じられてきているのか？ 私たちが生徒の宗教教育について具体的な計画をたてるとき、このようなさまざまな問題が、時に応じて検討されねばなりません。それではキリスト教主義の学校における礼拝のめざすところは何でしょうか。それはおもに教育的で、誘導的で、しかも霊感を与えることではないでしょうか。すなわちキリストに示された神の真理とこの真理との関連における人生の意義を教えること、神を愛するように若い人たちを導くこと、さらに、彼らがこの人生の意義を探求しつづけるように霊感を与えることでありましょう。そしてこの次のステップでは、生徒たちが自分自身の意志で教会の礼拝に出席し、キリスト教の生活に入っていくことが期待されます。

私たちは礼拝の目的、性質、回路、形式などについて、常に気をくばりたいものです。折々聞かれる生徒や先生のいろいろな声に耳をすましていなければなりません。「毎日行なわれる礼拝の出席を全生徒に強制することは、かえって目的とは正反対の結果を生んでいるのではないか。」「礼拝の回数が多すぎるので、習慣的になってしまい、礼拝の意味や精神がなくなってしまった。」また教師からの声としては「学校のチャペルにはいつも出ているが、日曜日には教会へ行ったことがない」など。

このような批判は、まじめに取り上げ、心にとめておくべきです。しかし、私は学校の礼拝は毎日つづけて行う方がよいと思っています。いちばん必要なことは、この毎日の礼拝を検討し、いろいろな変化を考えることです。

「マニュアリズム」ということばが現今流行していますが、それは手びき書にしたがって物事に処したり、今までそうしていたからというだけの理由で、ただ自動的に物事をやって行くことに対する批判として使用されることばです。学校のチャペルも、いつも同じ形式がとられ、全く機械的な儀式になりがちなので「マニュアリズム」におち入っていると批判することができます。

古代のヘブル人たちが寺院における礼拝の方式をうみだしたように、教会でも長い時代の推移の中で、神を崇め讃美する聖なる方法をつくり出してきました。ヘブル人たちの礼拝がイエスの激しく攻撃した偶像崇拝に堕落していったように、私たちの礼拝が魂を覚醒させるかわりに、却ってマヒさせるものになってしまわないように、私たちは常に気をつけていなければなりません。真の礼拝は生命の最も深い、最も内なる部分であるべきで、多くの一般的活動のうちの一つであってはならないのです。予言者イザヤが容赦せずに言ったように、礼拝が神の目に、いまわしい、嫌悪すべきものとなるのは、私たちが礼拝を生活とかけはなれたものにしてしまうときであります。イザヤの言葉は教会の礼拝に向けられたものですが、学校での礼拝にも同様に重要な言葉であります。

学校における礼拝は、その性格上、礼拝の形式や性質をいろいろ実験するのに、ある意味ではすぐ役立つ筈であります。学校の礼拝では教えるという目的があります。これには讃美歌、聖書、奨励、祈りという普通に行なわれる方法以外でも、努力すれば、多くの方法があります。無感覚でうるおいのないものになりがちな方法のかわりに、詩、劇、音楽あるいは科学をもつかうことはできないでしょうか。これらはすべて日々の学校生活や実際の経験にもとずくものなのであります。それらはまた、学校生活における礼拝に用いられるとき、精神的な面にまで深められるのであります。たとえば、文学の先生は人生の意義を追求する苦悩をあらわした立派な詩によって礼拝をすすめて行くことはできないでしょうか。その詩は一見したところ宗教詩でないかもしれません。しかし、感受性のゆたかな先生はその詩の精神的な深みにふれることによって、教え、霊感を与えることができないでしょうか。科学の力によって、私たちの生活は驚くほど機械化され、便利になってきました。しかし、理科の先生は「この科学の知識や機械の力は一体何のためにあるのか」という人間にとって究極的

な問いを生徒に投げかけることができるでしよう。このような人間の本質的な問に生徒を導びくことが礼拝でなされてもよいと思います。演劇部の活動をとおして、先生は人間存在の意義について問を投げかけ、人生に対する真の疑いをもたせた後につかむことができる確信を与えることはできないでしょうか。美しい音楽は私たちを感動させて神の偉大さをさとらせるものだということは、いまさら指摘するまでもありません。以上のような方法には実行力と新鮮な考えが必要であります。それはまた非常な労力と、先生と生徒の間の協力を要求します。

しかし、ここで注意をしなければならないことがあります。礼拝は、根本的な言えば、神が私たちのためになし給うたことに対する私たちの応答なのであります。それはただ、機械的に変化をつけたり、雰囲気をつくったり、適当な背景を配することによってなされるものでもありません。神に対する応答としての礼拝は実は、神の賜物として与えられるものであり、「聖霊の内なる働らき」によって可能になります。しかしながら、生徒は真の礼拝をなす可能性をもっています。というのは、指導者如何によって生徒は敬虔な態度をもち、純粋な理解力をもつようになるのであります。このためには指導者自身が敬虔に礼拝する人でなければなりません。そうでないと礼拝は学校における単なる行事になってしまいます。

終りに、実際的な面を二、三並べたく思います。私の学校では、誰か教会の牧師が全学期を通じて週に二回、礼拝で奨励をすることになっています、これは二つの点で大へんよい計画だと思います。第一に牧師は充分に時間をさいて宗教的な考え方を教え、礼拝を導くことができます。第二にこれは多くのばらばらで関連がなくなりがちの礼拝の話に連続性をもたせます。もう一つ述べたいことは、礼拝にもっと大幅に生徒のリーダーをつかってほしいということです。どの学校にも宗教部とかＹＭまたはＹＷＣＡがあります。そして、その中心になっている学生は、礼拝の司会を立派につとめ、時には礼拝の話すらすることができるように訓練すべきであります。さらに音楽や劇その他の芸術部門を通して礼拝に参加するグループをつくることもできます。このような試みは、礼拝に出席する生徒にもまたそのグループに参加している生徒にとっても大へん意義のあることだと思います。最後にふれたいのは、特に新入生に対しては礼拝の訓練をする必要があるということです。時間をつかって讃美歌をならったり、讃美歌についての知識を学んだり、祈りとその意味について教えをうけたり、討論することが必要です。また、主の祈りはその意味を教えるために、劇の形式をとって勉強させることもいいでしよう。学校の礼拝では献金はしないことになっていますが、特別の献金は時々行なわれます。キリスト教の礼拝ではこの献金ということも大切な深い意味をもっています。しかし、ここにも真の理解するための訓練が必要となってきます。

私たちは真の礼拝とは神へささげる生活を意味し、神の永遠の愛によって、同胞のためにつくす生活であることをさとるように生徒を導くことができます。

（女子中高教諭・英語）

同志社に育った社会主義者

——安部磯雄・山川均・高畠素之——

辻野　功

安部磯雄、山川均、高畠素之は、そろって同志社中退生である。もっとも安部磯雄の場合は同志社英学校正課卒業後、神学科に入学したが、グリーン博士の旧約聖書講義のことから、入学十一日にして親友村井知至とともに退学したのである。この中退生たちは、いずれも第一級の社会主義者である。しかも、彼らがともにキリスト教から社会主義へはいっていったという点で、さらには高畠が初めて完訳した資本論の紹介という点で共通の経歴をもっているのである。

安部磯雄のこと

安部磯雄は慶応元年（一八六五年）二月四日、福岡黒田藩士岡本権之丞の次男として生まれた。だから彼は、本来、岡本磯雄なのである。彼が安部姓を名乗るについては、次のような奇抜な話がある。

彼は岡本家の次男坊であり、親戚の村上家に男子がいなかったので、生まれて間もなく村上家の養子として入籍した。ところが、しばらくして村上家には男子が生まれたので、岡本姓に戻された。余談になるが、後に彼は村上家の令嬢駒尾と結婚することになるのだが、もし村上家に男子が生まれなかったならば、駒尾夫人とは兄妹の間柄で終ったに違いない。さて、彼は同志社入学後の明治十六年（一八八三年）二月に、竹内某と結婚して、竹内姓を名乗ることになった。当時、彼は十九歳、ところが妻となった女性はなんとすでに三三歳であった。次男坊である彼は、結婚すれば扶養家族を持つことになって、徴兵免除になるからと父に勧められ、顔をみたことすらない女性のところに名義上の婿入りをしたのである。ところが十八年に徴兵令の改正があり、既婚者でも六十才以上の老人がいない限り、徴兵免除の特典は与えられないことになった。そこで彼は、家風に合わぬという理由で竹内家から離縁してもらい、六十才以上の老人のいる家庭を八方手を廻わして探した。そして幸いに

して注文通りの家をみつけたが、それが安部家であった。彼は当時、徴兵のがれの養子の相場であった十五円を出して養子にしてもらい、安部姓を名乗ることになったのである。

安部磯雄が同志社へ入学したのは、明治十二年（一八七九年）九月のことであった。入学の目的は、海軍軍人になる準備として同志社で英語を学ぶことにあった。当時、彼は同志社がキリスト教主義の学校であろうなどとは想像もしていなかったのである。その彼が同志社生活を送るなかで、ついにキリスト教を信ずるようになり、十五年二月五日、新島先生から洗礼を受けたのであるから、運命とは不思議なものである。この日同じく洗礼を受けたものには、同級生の岸本能武太（後に早大教授）もいた。

安部磯雄が社会問題に関心を抱きだしたのも、同志社生活の中においてであった。彼の卒業演説の題目は「宗教と経済」であったが、「精神生活は宗教により、物質生活は経済学によりて指導さるべきものである」というのが、彼の中心思想であった。「社会主義は物質的基督教也、基督教は精神的社会主義也」というキリスト教社会主義の骨組みは、同志社時代の安部磯雄によってつくられたのである。

安部磯雄

キリスト教社会主義を信奉する安部磯雄は、実践活動に乗り出すに至った。社会主義研究会（明治三一年）・社会主義協会（三三年）・社会民主党（三四年）に代表される黎明期の社会主義運動は、安部磯雄と彼の同級生村井知至（後に第一外国語学校を創立して校長）とによって指導されたのであり、岸本能武太もまた、少なからぬ協力をしたのである。この一事をもってしても、黎明期社会主義運動において、同志社がいかに大きなウェイトを占めていたかが想像できる。

安部磯雄の社会主義運動において、特筆大書さるべきは、社会民主党の結成である。この社会民主党は明治三四年（一九〇一年）五月十八日に結成されたものの、即日結社禁止となったが、創立メンバー六名中、幸徳秋水を除いて他の五名、すなわち安部を先頭に木下尚江、片山潜、河上清、西川光次郎のすべてがクリスチャンであったことは黎明期社会主義運動の性格を象徴している。社会民主党は創立に際して、安部磯雄の手になる八項目の理想綱領と二八項目の実践綱領を含む「社会民主党宣言」を発表したが、この綱領は現在の日本がどの程度民主化されたかを測定する有効な物差しの役目をはたすものである。

山川均のこと

山川均は明治十三年（一八八〇年）十二月二十日、岡山県倉敷に生まれた。彼の同志社入学の経緯も面白いものである。彼

の夢は理学博士になることで、物理学を勉強するために東京へ出たくてたまらなかった。ところが彼の父は、京都くらいならいいが、東京は駄目だと上京を許さなかった。そこで当時国粋的であった山川は「将来、おおいにヤソ教と闘おう。そのためにはヤソ教を知る必要がある」として、明治二八年（一八九五年）四月、京都行きの列車に乗り込んだのであった。ところがこの列車が、彼を目的地とは全く違った方向に運んでしまったのは安部磯雄の場合と同様である。彼は二年間の同志社生活の中で、聖書を「地上に正義と愛と人道の天国を建設しようとする運動の記録」として読むようになってしまったのである。

山川均は明治三十年（一八九七年）の春、少数の同志たちと「タライのなかの龍巻ほどの小さな騒動をおこし」て、親友二人と共に退学した。この「小さな騒動」が何であったかは、当の山川自身が忘れてしまっている程だから、ほんの些細な事件であったに違いない。田中良一氏の話によると、山川が加わっている卒業写真が残っているとのことであるから、退学は卒業式直前のことであろう。

同志社を中退して上京した山川は、明治三三年（一九〇〇年）かの有名な不敬罪事件に巻き込まれるのである。山川は友人守田文治と『青年の福音』という新聞を発行したのであるが、その第三号に守田が「人生の大惨劇」と題して後の大正天皇・嘉仁親王と九条節子との結婚をとりあげ、この結婚を「節子姫の意に反した強制によるもの」であり、「人身御供」だと書いたのである。この文章に筆を加え、さらに「苦笑録」という題で、この結婚にあたってキリスト教徒が「ことさらに皇室にたいする忠誠をてらって世俗に迎合しようとしている態度」を批判した山川も、守田とともに不敬罪にとわれ、重禁錮三年六ヵ月罰金百二十円、監視一ヵ年に処せられた。

ところがこの事件に当惑したキリスト教界は、長老たちの連名で、彼がどこの教会にも属しておらず、真のクリスチャンではないと釈明し、また山川の記すところによれば、同志社からも、学校の名誉のために、彼は決して同志社を卒業した校友でないという声明が出されたとのことである。

不敬罪による入獄は、彼が真の社会主義者になる転機となった。というのは、彼は社会主義の始めも終りも胃の腑の問題であり、みこころが天になるごとく地上に実現されるのは、祈りによってではなく、経済組織を変革する社会主義によってであると考え、獄中において徹底的に経済学を学んだからである。

彼は明治三七年（一九〇四年）六月初旬、仮出獄で監獄の門を後にしたが、その時、入獄中差入れてくれたが、「看読不許」となってとりあげられていた書籍類を渡された。その中には前年十一月に発刊された堺・幸徳の『平民新聞』創刊号がはいっており、出獄した山川は、早速平民社を訪ね、幸徳秋水と相識るようになったのである。

彼は六月十一日には郷里へ帰り、二年有余にわたる沈潜の時期を過したのであるが、明治三九年（一九〇六年）十月になると、幸徳秋水から日本社会党機関紙『日刊平民新聞』の編集部員として招かれ、初めて社会主義運動の渦中に身を投じたので

あった。『日刊平民新聞』に参加してからの山川は、あえてここに述べる必要のないほど有名である。彼によってマルクス主義は初めて日本の土壌に根付いたものとなったが、それがいわゆる山川イズムである。山川は労農派の総帥として、日本の社会主義運動に不滅の足跡をしるした。彼の残した理論と精神は、いまなお日本社会党の中に、脈々と流れている。

山川均は戦後同志社を訪れたが、これを契機にして、不敬罪事件以来同志社に抱いていた複雑な感情も永解し、ことに彼自身同志社時代には、草鞋ばきで土曜日ごとに琵琶湖へボートを漕ぎにかよったこともあって、ボート部の試合には常に激励電報を打ってきたほどである。彼が同志社に対する懐しい思い出だけを抱いて永眠されたことは、お互に幸いなことであった。

高畠素之のこと

高畠素之は明治十九年（一八八六年）一月四日、群馬県前橋に生まれた。生家は元前橋藩の家老格の名家であった。彼は前橋中学の頃すでに洗礼を受けており、彼の同級生である「一人一殺」主義の井上日召によれば、彼は級友から「聖人」と呼ばれ、どんな争いでも、彼が口を出せば必ず解決したとのことである。

明治三七年（一九〇四年）四月、高畠は郷土の大先輩新島襄の同志社へ、牧師志願の給費生として入学した。ところが同志社生活は、彼にとって必ずしも満足のゆくものではなかったらしい。「学生一般新島時代を追思するはなけれどもイツ迄も新島々々で絶え間なく潮流する時代の思想に遠ざかりたる点は到底早稲田などに比して恥しき限りならん」とか、「宗教的臭味の学校だけに毎朝三十分間、全校生徒をあつめて諸教師の講話これ有り候えども、形式に流るるの傾き有って余り感服はできず兼ね候」と書いている。そして彼は同志社在学中にキリスト教に批判的になり、社会主義へ大きく傾いた。このような思想的変化が理由となって、彼は給費を打ち切られ、退学するに至ったのである。

社会主義者になった高畠は、『万朝報』『平民新聞』の購読を機縁にして知った堺利彦を頼って上京し、売文社に身を寄せた。売文社では、階下のがらんとした広間が応接間兼クラブで、ここには、いつも何人かの者が革命の気焔をあげていた。二階の大部分が仕事部屋で、廊下を隔てた小さな別室が社長室といった恰好で、そこには堺利彦が陣どっていた。高畠は三階の屋根裏にひとり閉籠もり、黙々とドイツ語の独習に励んでいた。そんな彼を、堺はきわめて高くかっていた。

大正六年（一九一七年）ロシア革命が勃発した時、その真髄を一番早く把握したのは高畠であった。当時にあっては山川均、荒畑寒村すらサンジカリズムの影響から脱しきっておらず、高

畠に一歩後れをとったとは、後年の寒村の回想である。翌年四月のロシア革命記念会の席上、後に福田大将暗殺未遂事件で検挙されたアナーキストの村木源次郎が幸徳事件のことを述べ、感きわまって泣きだしたところ、高畠は「幸徳事件はわれわれの運動を頓挫させただけだ！」とどなったという。いわゆる大逆事件について、このように核心をついた批判をしたのは、後にも先にも高畠ただ一人である。

大正八年、高畠はカウツキーの『資本論解説』を翻訳し、翌年には『資本論』第一巻第一分冊を翻訳した。この『資本論』の翻訳は大正十三年（一九二四年）に完成したのであるが、高畠は一日十三時間、前後八年の歳月をこの仕事のために費やした。『資本論』第一巻の詳細な解説が山川均の手によってはじめてなされたのは、明治四十年（一九〇七年）八―十月の『大阪平民新聞』においてであり、安部磯雄が『資本論』の翻訳に着手したのは『社会新聞』四四年五月十五日号からであるが、同志社の後輩たる高畠素之によって『資本論』の翻訳が、ここに完成したのである。

この高畠が大正七、八年を境に、突如として国家社会主義へ転向した。その理由は今もって明らかにされていないが、堺利彦は「資本論の翻訳を完成したマルクス主義者が、こんなふうになったのは、惜しみても、惜しみきれない」と言ったという。

（昭和三八年・同志社大学法学修士）

憲法研究所講座　昭和三十九年（秋の部）

抵抗に生きた日本人

9月26日　内山完造……岡田良夫
　　中江兆民……前田一良
　　花井卓蔵……秋山哲治
10月3日　出口王仁三郎……出口栄二
　　与謝野晶子……港野喜代子
10月10日　柏木義円……未定
　　河上肇……住谷悦治
10月17日　野呂栄太郎……井ケ田良治
　　犬養毅……土井多賀子
10月24日　斉藤隆夫……田畑忍
　　沢柳政太郎……相良惟一
10月31日　長田新……志賀英雄
　　山本宣治……田村敬男
11月7日　矢内原忠雄……塩谷饒
　　幣原喜重郎……一円一億
11月14日　布施辰治……黒田了一

所　同志社大学明徳館一番教室
時　毎週土曜日午後一時半より～四時
受講料　全期五〇〇円（本学法学部学生は半額）
　　当日一〇〇円
主催　**憲法研究所**
　　同大法学部研究内